

である。四万十川は、はじめて行った昭和35年から、昨年までの数回のうちに、変化といえば中村市へ国鉄が通じただけ。いまも水は澄み、山の緑は濃く、あゆの味は絶妙。

ゆったりと流れる蛇行型河川は、生来、せかせかしたわたくしの欠点と補完関係にあるのかも知れない。といって、わたくしはそういう河川を、歩いて見なければ承知できないというわけではない。2万5,000分の1地形図、できれば2,500分の1程度の大縮尺の地図を、机上にひろげて、あれこれ想像すること、これがまた楽しい道楽である。

1973. 11. 18

## デンマークの空

大和田 順子

私たちのヨーロッパ旅行は、飛行機の都合でデンマークのコペンハーゲンに寄航することになった。デンマークに立ち寄るのは今年はじめてなので、次にその印象の二三をあげてみよう。しかしデンマークに滞在したのは、前日の午後にコペンハーゲンに着いて、翌日の12時半の便で飛び立つという、わずか一泊の短い期間であるので、ほんの通りすぎの印象である点を御了承頂きたい。

コペンハーゲンのカストラップ空港に着いて入国審査を受ける。まことに簡単であり、ちょっと拍子ぬけするくらいだ。それにこの空港に着くと、まず空気の清く澄みきっているのに驚ろかされる。夏とはいえど北国なので、涼しく冴えきった空気が、肌にさわやかで実に心地良い。このカストラップ空港はフィンガー（送迎デッキ）がとても長く、ヨーロッパ旅行の最後の訪問だけに、疲れた身体にはショルダーバックの重さが身にしみて痛いくらいだ。後で調べたら、この空港のフィンガーは、ヨーロッパではバリについて長いそうだ。だから随分長い道のりを歩いたような気がしたのでらう。

空港からバスに乗って市内に向う。バスの車窓から見える風景は、実に広々としてのんびりしており、何となく整理されていて清潔であった。ただ、北欧らしくいわゆるムーアランドというか、ヒースランドというか、灌木の生えた水蝕土の荒地が、ところどころに存在していて、デンマーク人の勤勉な努力によって長い年月をかけて開発されてきたのだということが伺えた。緑色の濃い広い牧場では、牛がゆうゆうと草を喰んでおり、よく耕やされた麦畑やとうもろこし畑、そしてその間に点在する赤や青の屋根を持つ白壁の瀟洒な農家など、何となく牧歌的風景で、さすがに酪農国で

あるということをしみじみ思わせられた。農家の各家々が美しく、日本で言えばちょっと上流家庭の別荘のように見えるつくり方である。デンマークの国民には貧富の差が少なく、国民一人当りの所得が世界4位であると云われているが、一戸一戸の農家の富裕さが伺えまことに羨ましい限りであった。

やがてコペンハーゲンの市内に入ると、また、こじんまりと整備されていて、美しい町並である。丁度夏の終りの時期なので、どこの商店もバーゲンセールをしていたが、パリの裏町や日本のデパートの特売場のような混雑は見られなかった。町並もヨーロッパの都市たとえばブリュッセルやアムステルダムのように、家並がきちんと整備されていて、高層ビルが乱雑に建っている風景は見当らない。

私たちは早速市内見学に出かけた。クリスチャンボルグ城、ローゼンボルグ城、かわいい人魚像、そしてチボリ公園など。とくにチボリ公園は5月1日から9月15日までの開園とかで、私たちの訪れたのは8月23日なので、残りの夏を惜しむ人達で賑わっていた。この公園には中央の美しい池と噴水に面して、コンサート・ホール、劇場、映画館、レストランや各種の遊技場、そしてイスラム教寺院や五重の塔をまねた世界各国の古い建造物などがあり、コペンハーゲンの人達にとってはまさに憩いの場所である。8月の末ともなれば北欧の空は寒く、長袖の上着の上に更にコートを羽おっていても寒さが身にしみたのに、コペンハーゲンの人達は大笑で楽しんでた。やがて迎える長いきびしい冬をさげたい気持が、余計このように夏を惜しむ気持にさせるのだろう。

次にデンマークの人達は働き者だということだ。それは、朝早くから勤めたいそぐ人達の活気に充ちた様子、ホテル空港できびきびと働いている人達の責任ある態度などからも伺える。いわばプロテスタントとくにピューリタンにも似た職業についての倫理観で働いているように思えて、何となくすがすがしく見ていると心地よかった。ただ、この国の人達の風貌は、農夫らしい土くさい朴訥さと誠実さを身につけている人が多かったが。

なお、いろいろ書きたいこともあるが、紙数のかげんでこのあたりでペンを擱く。しかし、この次にも書かせてもらいたいと思っている